

## 涙のランナー

1985年の秋に、「涙のランナー―農家負債克服の軌跡」と題する連載記事が日本農業新聞に掲載された。

当時、畜産経営の規模拡大がすすむ中で、農家の負債問題が全国的に注目を集めていた。投資が大型化するにもかかわらず技術や経営管理・家計管理が伴わず、畜産物価格の変動もあって多額の負債を抱える農家の存在が注目されていたのである。

このようななかで、北海道や岩手県など、地方から優れた負債対策への取組みが始められ、それは、1985年に始まる畜産経営改善対策の全国運動へとつながっていった。このような時期に掲載された表題の連載記事は大きな反響を呼び、筆者も強くひかれながら読んだ記憶がある。

この記事は、負債対策に取り組む現場の姿を、負債農家とその家族、組合長から指導員までの農協のさまざまな役職員にスポットを当てて描いている。改善へ向けての家族を含めた農家の意識改革と、農協の指導の重要性が生き生きと伝わってくるし、今読み直しても、現在の農協運営にとって示唆に富んだ内容になっている。

負債対策は、関係者に膨大な努力を強いるものであるが、期待された効果を得るのは容易ではない。いったん負債過多に陥った農家を再建させるには大変なエネルギーを要し、そうであればこそ、負債の発生を未然に防止する指導が重要である。また、もし負債対策がとられなければ問題ははるかに深刻になっていたはずであり、負債対策に大きな効果があることは間違いない。

そういう意味で、全国で展開された負債対策への取組みは、一定の成果を挙げたことは事実である。またかつては、水面下に隠れていた固定化貸出が農協合併後に表面化することも少なくなかったが、農協合併の加速は、このような問題を是正する効果もあった。農協における自己査定開始も、固定化貸出をはっきりと認識することを促進した。

こうして、現在では、農家負債問題は社会問題として大きくとりあげられることは少なくなった。しかしこれは、負債対策が不要になったことを意味するものではない。現在でも過重負債に苦しむ農家は広範囲に存在する。そして、農家の負債対策は単なる「不良債権処理」に止まるものであってはならず、未然防止から経営改善・離農対策までをカバーし、農家自身の意識改革と改善への取組み、農協における農家の経営実態に合わせた濃密な管理・指導、これらと適切に連携する行政の取組みを含むものである。「涙のランナー」当時に生み出されたこれらの取組みが、風化していることはないであろうか。

当時の取組みを振り返り、今日の農家指導と農業金融に欠けていることがないか点検することは、大きな意義があるように思えてならない。

(農林中金総合研究所 基礎研究部長 石田信隆)